

< 闇に勝つ道 >

ヨハネ 13:21-30

主イエスが迫りくる十字架刑の前夜にしたことは、目の前にいる弟子たちを愛すること。しもべのようになって足を洗い、同じように愛し仕え合うようにという戒めを与え、戒めに従うあなたがたを通して、人々はわたしを受け入れると宣教のわざに招いてくださった。

これらのことを話されたとき、主イエスの心は騒いだ。

「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人が、
わたしを裏切ります。」 (ヨハネ 13:21)

- いよいよ時が来た。裏切りによって人の救いのための十字架のみわざが始まっていく。
- 主イエスが身代わりに負われる「罪の暗闇」が、その姿をクッキリと現わし始めた。

不思議なのは、弟子たちは裏切り者がユダだという事が分からないこと。

弟子たちは、だれのことを言われたのか分からず、
当惑し、互いに顔を見合わせていた。(ヨハネ 13:22)

「わたしがパン切れを浸して与える者が、
その人です。」 (ヨハネ 13:26)



ユダは、他の弟子に比べて特別に悪いところがあったわけではなかったのだろう。それどころか、主と弟子たちから信頼されて会計係を任されていた。できる人、熱心な人、皆を代表して施しをしに行くような人。しかし、その内に深い闇があった。

他の弟子たちが、この闇に気づかなかったのは、彼らもまた同じような闇に捉えられようとしていたからかもしれない。このシーンには、弟子たちの鈍さが際立つ。ユダの裏切りが分からないだけでなく、主イエスが裏切られることへの危機感のなさ。前もって語っておられた「死」が近づいていると思うことができない鈍さ。闇に侵されているからとも言える。しかし、それなら、だれが闇に打ち勝って生きることができるのだろうか…。

ユダは愛する主イエスを我が手に握り、ヨハネは我が身を主イエスにゆだねている

「…あなたがたのうちの一人が、わたしを裏切ります(渡します)。」 (13:21)
可愛さ余って憎さ百倍。愛多ければ憎しみもまた多し (愛情に潜む独占欲)

弟子の一人がイエスの胸のところまで横になっていた。イエスが愛しておられた弟子である。

(13:23)



振り返ってイエスの隣に座っていた自分を「イエスが愛しておられた弟子」と言った。愛を受けている自分。かつてはイエスを侮辱する人たちを滅ぼしてやろうかと怒ったヨハネ。「侮辱されない主イエス」、「侮辱させない主イエス」を愛した。今は、侮辱されようが、捉えられ、殺されようが、主は主であることを知っている。その確かな方に愛されていることを受け入れ、愛のふところに身を委ねて生きている。自分が愛することが先ではない、確かな方に愛されていることが先。

ユダはその手を飛び出した。まじめで一生懸命で、施しを熱心にしても、その愛は闇に飲まれた。その愛は、愛する者を死に渡す闇。批判し、裁き、握ったり引き渡したりする闇。

**生ける神のひとり子イエス様が自分のことを愛してくれていると分かって
信じた最初の愛を忘れずに、この方の愛の中にしっかりと立てるように。
主イエスのみこころに、わが身をゆだねてしまう安心を味わい続けることができるように。**